

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530762

研究課題名(和文) 中高生を対象とした精神保健・福祉教育プログラムの開発～当事者の語りから学ぶ～

研究課題名(英文) Development of mental health and welfare education program based on recovery stories for high school student

研究代表者

栄 セツコ (SAKAE, Setsuko)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：40319596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、公共の場における語りを行うことによって、精神障害をもつ当事者(以下、当事者)にエンパワメントをもたらすデザインを提示することである。実践の枠組みは、精神疾患の好発時期にある中高生を対象として、当事者が病いの経験を語り、その子どもたちから承認を得ること、それによって、語りを行った当事者が社会貢献できることである。

当事者の社会貢献が可能となるデザインとして、次の3つがあげられた。第1に、当事者がリカバリーの物語を語ること。第2に、当事者は語りによって、金銭的・社会的・精神的報酬を得ること。第3に、公共の場の語りの裏舞台には面接やグループの語り可能な場を設定をすること、である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to present a design that allows narratives in a public space to foster empowerment in the people with a psychiatric disability who relate them. Its framework targets middle and high school students who are at the most common age of onset of mental illness, and involves these people with a psychiatric disability talking about their experience of their illness, obtaining recognition from these young people, and thereby allowing storytellers who relate their own narratives to contribute to society.

The following three conditions were required for the design to enable the people with a psychiatric disability to contribute to society. First, that they tell the story of their recovery. Second, that they obtain pecuniary/social/psychological compensation by telling these recovery stories. Third, that behind the public storytelling a place where one-on-one and peer group narrative sharing can be conducted is established.

研究分野：社会福祉

キーワード：精神障害をもつ当事者 病いの語り 精神保健福祉教育 エンパワメント 共生社会の創造

1. 研究開始当初の背景

(1) 当事者による「語り」の重要性

近年、ソーシャルワークの潮流として、ストレンクス視点に基づくアプローチが推奨されている。その提唱者であるサリーブは、ストレンクスの種類として、生活経験による知恵、風習、言い伝え、サバイバー・プライドなどを列挙している。その中でも、語りは自己の経験を意味づけることでアイデンティティの再構成が可能となる点で意義があると指摘する (Saleebey: 2005)。

「語り」が研究として着目されるようになった背景には、計測・再現可能なデータから構成される実証的研究や「大きな物語」と呼ばれるグランド・セオリーの限界があり、対象の個別性や経験の意味に改めて関心が向けられるようになり、「語り (narrative)」に価値が見出されるようになった。

「語り」に関する研究は、語る行為、語りの内容、語り手の効用、語りの聞き手への影響に分類できる。精神障害をもつ当事者 (当事者) に着目すると、語りの行為とその内容については、江口ら訳の『病いの語り - 慢性の病いをめぐる臨床人類学』 (Kleinman: 1999) や田中 (1997) の『精神障害・当事者にとっての病いの意味 - 地域生活を送る四人のライフヒストリーから』、葛西の『青年期を生きる』 (2006) などの著書があり、病的な体験や生活の困難さが他者に語りとして伝えられる時、その課題は解決されているという臨床的事実の報告もある (Janet: 1919)。一方、近年、公共の場においても、当事者の病いの語りが聞かれるようになってきた。それに伴い、当事者の語りによる聞き手への影響として、当事者の語りは聞き手の精神障害者に対する偏見の低減に寄与することが報告されている (栄: 1998)。

このように、当事者による「語り」が語り手にも聞き手にもエンパワメントをもたらすという報告が多いものの、語りとエンパワメントに関連した先行研究では対面的・局所的な場に限定された語りを対象としたものが多く、公共の場で語る語り手の効用に関する研究はほとんどみられない。

(2) 学校教育におけるメンタルヘルスを切り口とした教育の必要性

不登校や適応障害を呈する小・中学生並びに高校生 (以下、子ども) の増加を背景として、思春期・青年期のメンタルヘルスを切り口とした精神保健教育の必要性が強調されている。しかし、我が国では 1978 年の学習指導要領から「精神病」「精神障害者」に関する項目が削除されており、子どもがこれらの項目について学ぶ機会がないのが現状である。また、教職員のメンタルヘルスリテラシーの習得度の課題もある (栄: 2008 2010)。このことから、子どもが精神病様状態を呈しても、子ども自らの受診や教職員の正しい対処が困難であることが予測される。

また、子どもの生きる力を育成し、共生社会の実現を理念に掲げる福祉教育に着目すると、そのプログラムは車いすやアイマスクの体験学習が主となっており、可視化が困難な障害を学ぶ機会や内容はあまりない。

(3) 精神障害当事者の「語り」に関する実証的研究 (萌芽研究・基盤 C 研究)

上記の研究背景に基づき、精神疾患の好発時期にある中高生を対象として、当事者の語り語り手と聞き手の双方に有用性がみられる活動を考案するため、2006 年度に、NPO ヒットに委託された大阪市就労支援等モデル委託事業の一環である「教育現場における精神障害者の語りに関する事業～当事者のエンパワメントと就労への試み～」に参画した。2007・08 年度には、日本学術振興会科学研究費助成金 (萌芽研究) 「精神障害当事者の語りの効用に関する研究 (代表: 栄セツコ)」を受託し、当事者による病いの語りをもたらす効果検証を行った。2009 年度から 3 か年にわたり同助成金 (基盤 C 研究) による「精神障害当事者の『語り』の有効性に関する研究 (代表: 栄セツコ)」を受託することができ、当事者による語りの介入教育が聞き手の子どもに一定の教育的効果をもたらせたこと、かつ語りを行った当事者も精神的・金銭的報酬を得てエンパワメントがみられたことを検証した。

しかし、子どもに一定の教育的効果があった当事者の語りの内容や、その語りの生成過程が明らかにされていない現状がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、公共の場における語り当事者にエンパワメントをもたらす場をデザインすることにある。そこで、語り部グループによる実践の事例研究に基づき、次の 4 点の目的を設定した。メンタルヘルスを切り口とした教育の概念整理を行う、精神障害当事者による語りを媒介にした福祉教育の有効性を検証する、子どもに教育的効果をもたらせた語りの内容を明らかにする、その語りの生成過程を提示すること、である。

本研究における語りの介入教育の目的は、当事者の語りを中心に置き、その聞き手である子どもの生きる力やメンタルヘルスリテラシーの向上、病いの語り手である当事者のエンパワメント、それをふまえて、共生社会の創造が実現することにある (図 1)。

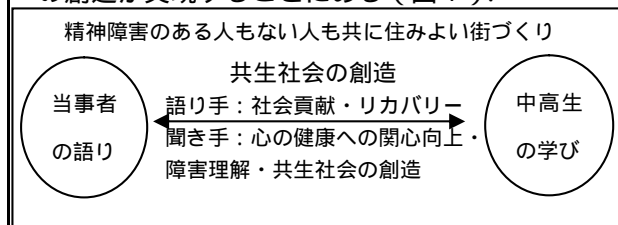


図 1 精神障害当事者の語り部グループの活動

語りの活動を実施するにあたり、当事者で構成されるグループ活動を採用した。また、教育機関における語りの活動の展開過程として、実演用の語りを作成する準備期、語りの実演、実演後のフィードバックが循環的に行われるように設計した。また、教育機関における語りの裏舞台として、個別面接の場、語り部で構成されるグループの場を設定した。

3. 研究の方法

(1) メンタルヘルスを切り口とした教育の概念整理

メンタルヘルスを切り口とした教育を実施している機関・施設をスノーボール方式によって収集し、その特性を整理する。

(2) 語りを媒介とした福祉教育の有効性の検証

筆者らの目的(図1)に合致する精神保健福祉教育プログラムを計画立案し、その聞き手の子どもの教育的効果を測定する。

(3) 子どもに一定の教育的効果があった介入教育の語りの内容の明示

教育的効果をもたらした精神障害当事者の語りの構造、並びにスクリプト/フレーズの使用を明らかにするために、語りの内容をKJ法を用いて分析する。

(4) 子どもに教育的効果があった語りの生成過程の提示

精神障害当事者で構成される語り部グループの実践活動を参与観察し、その活動の展開過程のなかで「子どもへの語り」の生成過程を分析する。

以上の調査研究は、大阪市立大学生活科学研究科研究倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

(1) メンタルヘルスを切り口とした教育の概念整理

メンタルヘルスを切り口とした教育は、疾病教育、メンタルヘルス教育、精神保健福祉教育、専門職教育に大別できた。以下、その特徴を記す(表)。

表 メンタルヘルスを切り口とした教育の種類

福祉教育
目的：生きる力の育成 / 共生社会の創造
授業：主に、人権教育 / 総合学習
内容：自己・他者理解 / 当事者の語り等
対象：小学生～大学生
提供：人権教育担当教員 / 地域活動支援センター や社会福祉協議会の社会福祉専門職等
保健教育 / メンタルヘルス教育
目的：リテラシーの向上 / ストレスの統制

授業：主に、保健・体育

内容：リテラシー教育 / WRAP 等

対象：小学生～大学生

提供：養護教諭 / 保健師の保健に関する専門職等

疾病教育

目的：疾病・障害の理解

授業：保健・体育

内容：疾病・障害の知識の提供

対象：中学生～大学生

提供：養護教諭 / 医療従事者・保健師等

専門職教育

目的：専門職に必要な心得と知識・技術の習得

授業：専門科目

内容：当事者や家族の語り

対象：専門職を目指す大学生

提供：担当教員 / 地域活動支援センターや社会福祉協議会の社会福祉専門職等

以下、本研究ではメンタルヘルスを切り口とした教育のうち、共生社会の実現を目指す「福祉教育」に照準をあてることにした。

(2) 語りを媒介とした福祉教育の有効性の検証

筆者らの目的に合致する福祉教育を企画立案し(図2)、本研究の趣旨に賛同の得られた教育機関の中学生145名(1校)に介入教育を実施した(2012年11月)。

精神保健福祉教育プログラム(案)
当事者の語りと専門職による補助教材を用いた講義

図2 精神保健福祉教育プログラム(案)

当事者の語りによる介入教育が子どもにもたらす効果を検証した結果、自分自身の精神的健康の保持・増進の関心度、精神障害・精神障害者に関する知識習得度、共生社会の創造に向けた知識習得度と意識変容において、介入教育後に好ましい結果がみられた。このことから、筆者らが企画した精神保健福祉教育は子どもたちに一定の教育的効果をもたらせたといえる。

(3) 子どもに一定の教育的効果をもたらせた介入教育における語りの内容の明示

子どもに一定の教育的効果をもたらした当事者(10名)の語りの内容をKJ法で分析した結果、語りは「精神疾患の受療前の対応に混乱した時期」「病いになって絶望に向かう時期」「再び自分の人生を歩みだす時期」

「意味のある人生を再構築する時期」の4つの時期で構成される『リカバリーの物語』だった (Andresen R., Oades L., Caputi P. 2003)。

語り手の当事者は聞き手の理解度に応じて、スクリプトを平易なものから専門用語に至るまで使い分けたり、聞き手のニーズに応じて語りの内容を書き直したりしていた。また、精神疾患の好発時期にある中高生に対して、当事者は「精神疾患の受療前の対応に混乱した時期」に多様なスクリプトを使用したり、精神障害者に対する偏見が助長しないような言葉を用いたりしていた。加えて、当事者は「共生社会の実現に向けた協働への期待」をメッセージとして伝えたいとしていた。

このように、当事者の病いの体験は各々異なるものの、自己物語の構造に類似性がみられた。つまり、教育的効果をもたらされた当事者の自己物語は「共生社会の実現に向けた協働への期待」をメッセージとする定型化された『リカバリーの物語』だったのである。

4) 子どもに教育的効果をもたらせた語りの生成過程の提示

語り部グループの実践による事例研究を行った結果、子どもに教育的効果が見られた「リカバリーの物語」は、語りの一連の展開過程において、当事者が面接の語りやグループの語りが往還的に利用できるなかで作成されていった。特に、グループの場において、当事者同士の病いの語りと言葉が言いばなし・聞きはなしのなかで受容されると、病いの語りを教育機関における子どもに向けて語り直すことがみられた。それは「私の物語」よりも「私たちの物語」の語りだった。この語りに対して、聞き手の教育機関から謝礼をもらうことや、子どもたちから肯定的な感想文が寄せられることで、病いの語りをした当事者にエンパワメントがみられたのである。

以上のことをまとめると、本研究は「中高生を対象とした精神保健福祉教育プログラムの開発～精神障害当事者の語りから学ぶ～」をタイトルとした、組織的次元のエンパワメントアプローチの実証的研究である。本研究の目的は公共の場における語り当事者にエンパワメントをもたらす場のデザインを明示することにある。

具体的な実践枠組みは、教育機関に当事者が出向いて、子どもに病いの経験を語るというものである。語りによる実践の結果、当事者の病いの語り子どもたちの生きる力を育成し、共生社会の実現を掲げた精神保健福祉教育に一定の教育的効果を生む可能性があること、そのことによって、語りを行った当事者にエンパワメントがもたらされることが明らかになった。その際、語り手である当事者の組織的次元のエンパワメントには、当事者が聞き手から称賛を得る「リカバリーの物語」を作る／語ることが不可欠だった。それには、公共の語りの裏舞台に個別面接や

グループの語りが可能となる場のデザインが不可欠だったのである。

しかし、次の3点の課題が残っている。

第1に、メンタルヘルスを切り口とした教育の実施調査(10か所)を行った結果、語りを単独とした教育プログラムはみられず、専門職による講和、自己理解や他者理解のワーク、交流学习などとセットでプログラム化したものが多かった。このことから、語りを活用した精神保健福祉教育プログラムの構造に着目して、教育的効果のあるプログラムを開発することが課題といえる。

第2に、教育機関という公共の場における語り当事者にエンパワメントをもたらす可能性を見いだせたものの、未だ福祉教育においてメンタルヘルスを切り口とした教育はほとんどみられない。このことから、当事者の語りを組み込んだ精神保健福祉教育の普及システムを開発する必要がある。

第3に、本研究は組織的次元におけるエンパワメントアプローチを実践したものであり、今後政治的次元のエンパワメントアプローチをどのようにリンクさせるのかを検証する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

栄セツコ、精神障害者にエンパワメントをもたらす公共の語りの場の設計、コア・エシックス、査読あり、11巻、2014、83-94。

栄セツコ、病いの経験に意味を見出すストレンクスモデル、精神科、依頼論文、25巻6号、2014、614-617。

栄セツコ、精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究—ソーシャルワーカーのアイデンティティを伝授する試み—、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、40巻第1号、2014、133-145。

栄セツコ、社会貢献としての病いの語り—精神障害当事者による福祉教育の「場」に着目して、コア・エシックス、査読あり、10巻、2013、109-120。

栄セツコ、精神障害当事者が参画した中学生に対する福祉教育、日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要、依頼論文、22巻、2013、35-47。

栄セツコ、早期支援における精神障害当事者の語りの意義、精リハ誌(精神障害者リハビリテーション学会誌)、依頼論文、16巻第1号、2012、38-42。

[学会発表](計10件)

栄セツコ、当事者の語りから学ぶ—中高生の精神保健福祉教育プログラム—、文部科学省委託事業/みやぎ子どものこころのデザイン教育実行委員会『これからの学校メンタルヘルス教育セミナー』『こころを学ぶ授業』

サポーター研修会』、2015年2月8日、エルソーラ仙台（宮城県）。

栄セツコ、当事者の語りから学ぶー語りのもつ力に着目して、NPO 法人こころ・あんしん Light 主催『はじめよう！学校で！ーこころの不調・病気を学び回復を支える授業ー』、2014年12月14日、尼崎市女性センター（兵庫県）。

松永貴久美、栄セツコ、中学生・高校生を対象とした精神保健福祉教育の試み～就学期に発病した当事者・家族が作成した学習教材～、日本精神保健・予防学会、2014年11月15日、早稲田大学（東京都）。

船越明子、栄セツコ、増川ねてる、「病いの語り」はどのように作られ、どのように語られるのか？（自主シンポジウム）、日本精神障害者リハビリテーション学会、2014年10月30日、岩手県民情報交流センター（岩手県）。

栄セツコ、船越明子、病いの語りを行う精神障害をもつ当事者の自己変容のプロセスとその影響要因、日本精神障害者リハビリテーション学会、2013年11月30日、コンベンションセンター（沖縄県）。

栄セツコ、清水由香、中学生の「生きる力」の育成を目指した福祉教育の効果検証、日本精神保健・予防学会、2013年11月23日、学術総合センター（東京都）。

栄セツコ、山口創生、中学生に対する精神保健福祉教育における当事者の語り - 語り で伝えたい内容 GI を通して -、世界精神医学会アンチスティグマ分科会国際会議、2013年2月14日、砂防会館（東京都）。

栄セツコ、メンタルヘルスと福祉教育（シンポジウム）、日本福祉教育・ボランティア学習学会：課題別研究、2012年11月24日、常盤大学（茨城県）。

栄セツコ、清水由香、芦田邦子、精神保健福祉教育プログラムの効果的な実践モデルの構築に向けて 語り部グループ A の活動から検討する、日本精神障害者リハビリテーション学会、2012年11月17日、神奈川県立大学（神奈川県）。

栄セツコ、清水由香、学校教育における精神障害当事者の語りをもたらす意義 - 語りの活動による精神障害当事者の自己変容 -、日本社会福祉学会、2012年10月20日、関西学院大学（兵庫県）。

〔報告書〕(計3件)

栄セツコ編、中高生を対象とした精神保健福祉教育プログラムの開発～精神障害当事者の語りから学ぶ～（平成26年度成果報告書）2014、78頁。

栄セツコ編、中高生を対象とした精神保健福祉教育プログラムの開発～精神障害当事者の語りから学ぶ～（平成25年度成果報告書）2013、77頁。

栄セツコ編、中高生を対象とした精神保健福祉教育プログラムの開発～精神障害当

事者の語りから学ぶ～（平成24年度成果報告書）2012、70頁。

〔図書〕(計1件)

やどかりブックレット編集委員会編、語り部グループ「ぴあの」編集委員会著、こころの病いの物語をつむぐ 学校における語り部活動、2015、印刷中

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

第11回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）受賞：NPO こころ・あんしん Light「こころの不調を抱える子どもの家族・当事者・支援者による思春期精神保健福祉教材づくりと啓発活動」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栄 セツコ (SAKAE SETSUKO)
桃山学院大学・社会学部・教授
研究者番号：40319596

(2) 研究分担者

()
研究者番号

(3) 連携研究者：

清水 由香 (SHIMIZU YUKA)
大阪市立大学・生活科学研究科・助教
研究者番号：90336793

船越 明子 (FUNAKOSHI AKIKO)
三重県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：20516041